五島市という自治体

- **概要**　五島市は、九州の最西端、長崎県の西方海上約100kmに位置している。五島列島の南西部にあって、総面積は420.12㎢、10の有人島と53の無人島で構成されている。（五島市HPより）

- **人口**　**34,956人**（19,578世帯）令和5年1月
- **移住者数**　245人（令和4年）
- **高齢化率**　41.5％
- **学校と生徒数**　令和4年4月

  小学校（14校）1,486人・中学校（10校）785人

  高等学校（4校）759人　　**計　3,030人**

- **歴史と文化**　白村江の戦い（663年）後、新羅との外交関係が悪化すると、遣唐使は五島から東シナ海を横断し、波の高い外洋を通過する危険な航路をとるようになった。最後の寄港地にあたる五島において航海安全を祈り旅立った。その中には、天台宗を伝えた最澄と真言宗を広めた空海もあり、彼らに関する伝説が多く残っている。また潜伏教徒の歴史があり、市民に一定程度のカトリック教徒がおり、地域ごとに教会がみられる。

- **産業と観光**　赤サンゴを含めて宝飾品の製造が盛んだったが、資源の枯渇と共にブリ・真珠などの養殖業に切り替わり、高齢化や魚価の下落と共に養殖は大手企業によるマグロ養殖、一般漁師は定置網漁に置き換わっている。地域によっては水源確保に苦慮しているが、コメ生産も少なくはない。毎年もち米も生産する農家では、「かんころ餅」をふかして干したさつまいもと併せて練り上げ作る習慣がある。これが特産品として観光施設などで販売されている。ヤブツバキが山の中に自生しており、毎年2月になると「椿まつり」を開催している。

島に残る伝統文化（神楽や念仏踊り「チャンココ」「カケ」など）の子供たちへの伝承

遣唐使や**倭寇**をはじめ五島は文書で記録された歴史遺産が古くから多くある地域の一つである。どのように島で始まったのか伝わっていないが、お盆には「チャンココ」、「オーモンデ」、「オネオンデ」、「カケ」と呼ばれる８００年の歴史がある念仏踊りが家々を回ってくる。また、キリシタン大名が増えていた時期と同じくして広まった神楽は、この五島の地でも土着し、現代まで４００年以上引き継がれている。

消える街　消える伝承

　伝統芸能はかつては限られた各家族の中で脈々と残されてきた。しかし、高度成長期を機に、多くの人々が土地を離れ、継ぐべき家が消えていく状況が続いていた。

　それに合わせ、地域に保存会が生まれ保存会が地域の子ども会や学校教育の場などで伝承活動を始めてきた。

　しかし、驚異的な速度で進む過疎化の下で、伝統文化を子ども会や学校教育の場を使いながら子供たちに継承させるという取組みは限界にきている。地域にあった**学校は統合**され、町から子供たちの姿が消えた。

失われる宝

　これはもはや当市だけの問題ではない。今や日本中の伝統芸能が消滅しようとしている。今の人数でできる形に矮小化させて維持したりできる内は良いほうで、既に存在すら忘れ去られてしまった芸もまた少なくないとみられる。

Project 遺すための先進的なアプローチを探したい

Project 1　島外者の視点で島の伝統文化を考える

神楽や念仏踊りは全国どこにでもあるものだが、これらが、京都から直線距離で700km離れた五島に海を越えて文化が到着するまでには、「土着」「解釈」「装飾」などの**歪曲が生じた**に違いない。また、時を経て、都では廃れてしまった作法が**化石のように隔離され**、残されているかもしれない。五島の伝統芸能は外からどのように見えるか。

✓都内でのワークショップ実施

まず地域住民以外の目線で伝統芸能を映像で観てもらった上で、これらの**伝統芸能の異様さや奇抜さ**を率直な言葉で評価して欲しい。また学校教材にするための斬新な方法を考えたい。

✓現地での座談会実施

五島に滞在して、外で感じた**異様な踊り**や**不思議な舞**を体験し、演ずる側の視点で面白さを体現した上で、地域住民や子供たちと遠慮なく語り合って欲しい。

Project 2　感動と所作を数値化する（例）

伝統文化をデジタル映像で保存する等は自ずと進められると想定している。しかし、映像だけでは伝えられない面を補う方法を考えたい。例えば初めてこの芸能を**観た人の感情**や、携わる人の**気持ちの高揚感（満足感）の数値化**ならびに**加速度ロガーを用いた所作の数値化**等。

✓満足感の数値化

ワークショップ参加者のマインド変化を時系列で評価する。評価方法は将来的に比較できるように数値化したい。例えば**聞き取った感想をテキストマイニング**＊などによって行ったり、所作については**バイオロギング技法**を利用してはどうだろうか。

✓子供たちに伝える意義の再発見

働き方改革によって、課外活動の優先度が下がっている中で、学校教育の場に伝統文化継承を取り込む意義を再発見し、その有用性を**定量的に示せる材料**を上記の方法を通じて整える。

君との島での挑戦が過疎地を変え、日本を変える。

＊Jia, Susan. "Leisure motivation and satisfaction: A text mining of yoga centres, yoga consumers, and their interactions." Sustainability 10.12 (2018): 4458.

東京大学FS実施スケジュール

5・６月（適切な時期に対面では１回）

当地地域課題と当プロジェクトについての説明を東京都内で行う。ワークショップの実施。五島の伝統芸能を映像で紹介する。初めて伝統芸能を観た時に感じた魅力などを語り合いながら、当地の芸能を材料にしてこれからの「伝統教育の学校教材」とはどのような形が良いかアイディアを出し合う。

８・9月（現地で１回、補助的にリモートを利用しながら）

リモートなどで事前にチャンココなど保存会の方々との交流。実際に踊りを習うなどの体現する。また現地で実際に神楽の体験。チャンココや神楽を伝承する子供たちとの交流を行う。創案した「教材」が実際の学校現場で実働できるか、課題は何かを現地ワークショップで洗い出す。

11月

魅力の分析・学校教材プログラムの組み上げ。

12・1月

現地報告会準備

２月

五島市内において伝統芸能祭（別途開催を企画）の中で前半は演舞会、後半に報告会を交えたパネルディスカッションを行う。

なお当市プロジェクトの成果については、モデル校での実施と並行して、市広報への掲載だけでなく、関係学会での発表・学術論文への投稿で公表していく予定。